復興イベント「ツール・ド・東北」が招いた副産物

東日本大震災で甚大な被害を受けた三陸沿岸を、自転車で走ることで復興を後押しするイベント「ツール・ド・東北」を、弊社とヤフーが主催して、ことしで６年になる。震災の傷跡がまだまだ深刻だった２０１３年の初開催以来、参加ライダーの累計は約１万８５００人に上る。復興が進む被災地の「いま」を体感しながらペダルをこぎ、地元住民とも交流できる一大サイクルイベントに成長した。開催の主目的が「震災からの復興」であることに揺るぎはないが、インバウンドの増加という「副産物」も見えてきた。

ことしの第６回大会は９月１５、１６両日、気仙沼市から仙台市までの宮城県沿岸を走る最長２１０㌔の計９コースで開催。全国から約３７００人のライダーが参加した。新設コース「仙台発グループライド＆クルージング」（６０㌔）に参加したのが、台湾の世界的自転車メーカー・ジャイアントグループ最高顧問のトニー・ロー氏を代表とする一行約１０人。台北と仙台空港とは毎日、定期便が運航しており、宮城県、仙台市とも台湾をインバウンド増を図るメーンターゲットに据えている。宮城県知事が一行とともに自転車で走行、仙台市長がスターター役を買って出たのは大会趣旨への賛同もさることながら、そんな背景があることも想像に難くない。

「ツール・ド・東北」のキャッチフレーズは、「応援してたら、応援されてた。」。コース沿道では、地元住民たちが大漁旗や小旗を振ってライダーたちに声援を送る。エイドステーション（休憩所）では、サンマのすり身汁、ホタテ焼き、フカヒレスープなど三陸の海の幸をふんだんに使ったおもてなし料理が振る舞われる。台湾だけでなく、海外からのイベントへの関心の高まりが震災の風化を防ぎ、インバウンド増にもつながれば、主催者としてこれほどうれしいことはない。

河北新報社　事業局次長　鈴木 裕

復興工事のつち音を聞きながらペダルをこぐライダーたち。
後方に見えるのは被災した防災対策庁舎＝宮城県南三陸町